

國學院大學学術情報リポジトリ

澁澤敬三の民俗学：その方法と可能性：
特集日本民俗学の展望を拓く：
伝承文学専攻開設二十五周年記念

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 悟, Ishigaki, Satoru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000263

澁澤敬三の民俗学——その方法と可能性

石垣 悟

一、はじめに

ここ数年、某大学で「民俗学」を非常勤で講義させてもらっている。講義名が「民俗学」なので、日本の民俗学の起ち上がりとは展開を話し、柳田國男や折口信夫をはじめとした先学の仕事から方法や視座などを紹介している。そこでは澁澤敬三にも触れているが、きっかけは当該科目が学芸員資格に関わるため配慮を求められたことによる。そのため、いざ整理してみると、敬三の学問を意識的に検討してこなかったことに気づかされ、

敬三の構想した民俗学とは何だったのか考えさせられるようになった。

敬三については、澁澤栄一の嫡孫、戦前・戦後を代表する財界人、財界と学界の二足の草鞋を履いた特異な人物、そして多くの研究者を援助した偉大なパトロンとして、その人生や為人を評したものはみられたが（代表的成果は佐野一九九六・一九九八など）、学問的、特に民俗学から理論的検討を加えたものは必ずしも多くない。民俗学系の辞典類をみても、『日本民俗事典』（一九七二・弘文堂）や『日本民俗大辞典』（一九九九・吉川弘文館）は略歴を記すに留まり、民俗学の展開に深く関わっ

た人物二十三人を取り上げた『日本民俗学のエッセンス』（一九七九・ぺりかん社）も、その人物像と業績を簡単に整理している程度で、重要性は指摘されるものの、十分な学的検討が加えられてこなかったように思われる。

そうした中、二〇〇二年に横浜市歴史博物館が企画展で敬三を取り上げ、人生を顕彰するとともに学問の可能性を追求し、日本民具学会も敬三の仕事から民具研究の歴史と方法を整理するシンポジウムを開催した。さらに、敬三の没後五十年にあたる二〇一三年には、再び日本民具学会が敬三の民具研究に関するシンポジウムを、国立民族学博物館が特別展を開催し、翌二〇一四年にも神奈川大学日本常民文化研究所が国際シンポジウム「渋沢敬三の資料学―日常史の構築」を開催するなど敬三の学問への接近が活発化してきた。

その点で近年、日本の民俗学の学史を詳細かつ簡潔にまとめた新谷尚紀が、民俗学を柳田國男が創生し、折口信夫と澁澤敬三が協力して育てた学問と評し、柳田と敬三の常民観を比較検討している点は敬三の学的評価を本格化させる重要な動きといえよう（新谷二〇一一）。また、折口信夫について精力的に研究成果を発表している小川直之が、関連して敬三の研究法、特に画像の扱いについて「描かれた画像を見ながら民俗を発見し

ていく作業」により「定型的な、伝承されている生活様式を見出ししていく研究」と評している点なども注目される（小川二〇〇四 一〇三頁）。

拙稿では、こうした先学の成果を眺めつつ、敬三の著作に改めて注目して敬三の構想した民俗学の方法と可能性を検討し、それが柳田や折口の民俗学と並びうる「もう一つの民俗学」としての学的意義をもつことを確認したい。

二、学問的視座

最初に敬三の学問的な視座を確認したい。敬三の学問を、有賀喜左衛門は「柳田の開いた道を絶えず眺めつつ、柳田が拓き残した原野に自分の道を開こうとして来た」と評し（有賀一九七六 一五六頁）、福田アジオも「柳田國男の民俗学を意識して組み立てられ」つつも、「柳田の民俗学を逸脱し、新たな方向に向かおうとして」いたという（福田二〇〇二 八二頁）。また佐藤健二は、鹿野政直のいう「民間学」の「生活」というキーに注目し、敬三の学問を柳田民俗学と並ぶ「もう一つの民間学」と位置付ける（佐藤二〇一四）。

柳田が、当時の史学を相対化しながら民俗学を起ち上げたこ

とは周知のとおりである。「歴史といふ知識は既に発端に於て、行く、政治史を以て其主流とすべき傾向を具へて居た」「歴史は其文字の表面には無くて、寧ろ全然筆を下されない裏面が、人を教へ又考へさせる」というように(柳田一九四四 一二、一五頁)、それは人々の普段の生活に関する歴史を明らかにすることであった。

こうした柳田の歴史観と歩調を合わせるように、敬三もまた史学を批判する。「我が国の過去の歴史的記録労作を顧みると、殆ど全てが自慢史ばかり」として「失敗史は書けぬものか」といい(澁澤一九五三 四八、四九頁)、成功の歴史ばかりが記録された国史に対して文字で残されなかった失敗の歴史を描く必要性を指摘する。柳田と敬三の歴史観は微妙な相違も見せるが、当時の文献偏重の史学・国史を相対化しながら視座を獲得していた共通性は注目すべきだろう。

では、文字で十分残されなかった歴史に接近する視座とはどのようなものか。民間学を主題、担い手、方法、文体という四つの論点から整理した佐藤健二は、民間学を、生活という主題について生活者の営みから接近する方法に則り、日常語という身近な文体で記述する学問とする(佐藤二〇一四)。生活に軸足を置くということは、生活者の視点からの生活を描くことで

ある。敬三は、生活者を「常民」と呼んだ。敬三は、柳田とともに「常民」の語を早くから用いた人物でもある。ただ、敬三の「常民」は、柳田のそれと質を異にし(有賀一九七六、新谷二〇一一)、単純明快に庶民を指したから、文字に十分残されなかった「歴史」の具体を、「常民」＝庶民の視点から描こうとしたのが敬三の学問の基本的視座であったといえよう。

三、調査対象

(一) 民具

こうした視座で敬三が調査対象としたものは何だったのか。柳田は、主に「(語りを含む)言葉」を手掛かりに究極的には生活者の心意に迫ろうとしたが(石垣二〇一六)、敬三が手掛かりとしたのは民具、文獻、図像、言葉の四つで、それらを民具を中心に総合的に扱ったと考えたい。

敬三は、民具を「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」と定義し、「我々祖先の心を如実に示現している点に奇しき統一があり」、「全体の一部として見て、これを作った人々の心を見つめ」るとして調査対象の中心に据えた(澁澤一九三三 一六、一七頁)。柳田が生活の言

葉の向こうに心意をみたのに対し、敬三は生活の物の向こうに心意をみたのである。

敬三の民具研究の淵源は、アチックミュージアムの活動、特に初期の玩具や達磨の研究にある。それは、玩具や達磨を学的資料として扱うことで、地域性・分布や系統、信仰、製作動機、伝播などへ接近する試みであり、当時流行していた玩具収集ブームとは明確に一線を画した。

その後、敬三は玩具や達磨の研究を失敗と位置付け、生活や生産に直結する用具類へと対象を移す。その中で民具を収集・調査する指針として整理したのが、『蒐集物目安』（一九三〇年）や『民具採集調査要目』（一九三六年）であった。『蒐集物目安』は、早川孝太郎が中心となつてまとめられたが、敬三の意向が反映されたとみえていい。そこでは民具の収集・調査を「庶民生活ヲ中心トスル文化史ノ研究」とし、「發生ノ原因トカ、使用價值ノ變遷即チ改良又ハ退化等ノ過程ヲ知ルベキ準備ノ下ニ、ソノ用途ノ實際、材料ノ如何、製作様式等ニ關點ヲ置イテ、一方ニハ地方的ニ存在ノ意義ヲ開明スル為ニ努メテ、採集地、名稱又ハ使用者所持人トノ關係ヲモ明ラカニ」するとされた。

『民具採集調査要目』は、『採集物目安』を改訂したもので、名称、採集・採集地、製作・製作地、材料、使用・使用地、分

布、由来の九つの調査項目が明示され、民具を「衣食住に関するもの」「生業に関するもの」「通信運搬に関するもの」「団体生活に関するもの」「儀礼に関するもの」「信仰・行事に関するもの」「娯楽遊戯に関するもの」「玩具・縁起物」の八つに分類した。

玩具・達磨から民具への移行については、敬三自身が玩具研究の失敗から民具研究へ進んだと顧みることもあつて「転換」とみる向きもあるが、小川直之が「拡大」と評したように（小川二〇〇三 一頁）、学的発展と捉えるべきだろう。玩具研究の学的見通しが民具研究にも受け継がれ、『民具採集調査要目』の八分類に「玩具・縁起物」が含まれるのはその証左であり、玩具研究は民具研究の初期段階であつたというべきだろう。

(二) 文献

敬三の学問では民具が中心的調査対象であつたが、いっぽうで敬三の関わった仕事をみれば、民具に限定されない様々な対象があつたことがわかる。その最たるのが文献（文書等）で、自身が初めて手がけて学界へ向けて出版した『豆州内浦漁民史料』も文献の集成であつた。これは、網元・大川家をはじめとした漁家に伝えられた、中世からの膨大な文書群で、一九三二年、敬三が長期滞在した伊豆内浦で発見した。敬三は、早川や

祝宮静らの協力を得ながら、内浦の漁業制度や漁業の歴史を記すこの文書群の整理に没頭し、『豆州内浦漁民史料』全四巻（一九三七―三九年）として出版した。

これらの文献は、当時の史学の扱った中央為政者の記録ではなかった点で注目されるが、いっぽうで敬三が「地図を開かず、また実地を見ないなら、あの国立公園にも一度は擬せられ」とした駿河湾の絶景は想像もできない」「常に見るもの常に為す」とは記録されず何事かの事件のみ書き残される歴史の影をまざまざと見せている如き気がする」とも述べている点は注意を要する（澁澤一九三七―一五七八―五七九頁）。文献の重要性を認めつつも、その記述が限定的であると認識していた点は見逃せない。

（三）図像

書かれた文献と並んで敬三が注目したのが描かれた図像である。今日、絵巻物などを資料として利用することはごく普通にみられるが、図像に美術的価値と異なる学術的価値を見出した点は当時としては斬新であった。敬三は、図像から貴族や僧侶、武家など上層階級に関する部分を除けば、「当時の常民の生活記録」が浮き彫りになるとし、図像が庶民生活の一端を知る一級資料であるとみた（澁澤一九四一 六〇七頁）。それは、言

葉へ着目することで上層階級ではない平民の歴史の描写を構想した柳田と根を同じにする。

図像は、民具との絡みでいえば、民具がいつ、どのような人々に、どのように用いられていたかを、ある面で文献以上に具体的に知る手掛かりを与えてくれた。一九四〇年には絵巻物研究会が起ち上げられ、「絵引」という独特の発想で「絵巻物による日本常民生活絵引」全五巻（一九六五―六八年・角川書店）が編まれた。

（四）言葉

敬三は、柳田の重視した言葉へも配慮する。しかし、その態度は、言葉を重視しつつも言葉に拘泥せずにそこから社会経済全体に目を向けるものであり、それ故に言葉だけで完結させず、時に言葉以上に実物・実態を重視するものであった。

柳田の言葉への態度は、『蝸牛考』（一九三〇年）に代表される。全国の蝸牛の呼称を集め、デデムシ系、マイマイ系、カタツムリ系、ナメクジ系、ツブリ系に分類して地図上にプロットすると、各系統が同心円を描き（周囲論）、それが呼称の変遷を示す（重出立証法）。その資料操作と分析は見事といえ、『蝸牛考』以外でも、同じ音の言葉、同じ意味の言葉を集めて比較することで事象の歴史的本質に迫る論理展開は多い。

いっぽう敬三の言葉への態度は、魚名研究に象徴される。

一九二七年より本格的に取り掛かった魚名に関する膨大な資料の整理は、『日本魚名の研究』（一九五九・角川書店）として上梓された。この中で「生物の一つである魚類の存在は自然現象である。これに反し魚名は人と魚との交渉の結果成立した社会的所産である」といい（澁澤一九五九 一一頁）、延喜式などの各種文献も用いながら、魚名のみならず、漁撈法、加工法、製品の用途、産地、さらには神饌との関わりなど、魚に纏わる様々な情報を整理する。敬三は、一種の魚がいくつもの名前をもつことについて、人と魚との社会経済的な関係が命名に大きな意味をもつと指摘する。

要するに、柳田が生物としての蝸牛の言葉（命名）を扱ったのに対し、敬三は社会的産物としての魚の言葉（命名）を対象とした。結果、言葉の相違を、柳田は地理的分布から変遷に結びつけ、敬三は社会経済的背景に結びつけた。¹⁾

このように敬三は、民具・文献・図像、言葉、いわば「物」「字」「絵」「言」の四者を総合的に扱った。加えて四者は、民具とそれを取り巻く社会経済や歴史を中心とし、それらをより正確かつ深く理解するために文献、図像、言葉も用いるという関係にあった。その典型的な成果であり一つの到達点でもあったのが、

『所謂足半に就いて（豫報）』（一九三六年）である。ここでは、収集した足半三四七点を取り上げながら、文献や図像から足半がいつから、どのような人が使ってきたかという史的情報を得、言葉からその呼称や使用法、製作法等の情報を得ている。

四、実物・実態の重視

民具を中心におく態度は、実物重視の態度に他ならない。『所謂足半に就いて（豫報）』で民具は「直接具體的な標本資料」とされ、「間接抽象的な資料」の文献や図像と明確に区別される（アチックミューゼウム一九三六 五八頁）。言葉については触れられないが、言葉もまた「間接抽象的な資料」といえよう。敬三は、魚名の方言に関して「実は何の魚を指すか解らない場合が多い」から「魚の実体とアスデイティブアイされている魚の方言」を集める必要があるという（澁澤一九四一 六一―頁）。「方言」と「実体」を照合する。何気ないことだが、ここに敬三の学的方法の本質がある。

敬三は、当時の民俗学について「素人であるからよくは解らないが」と断りつつ、「民俗学に、今まで生物学的とでも云いたいような実証的研究法があまり用いられておらぬことをいさ

さか不満に思」い「アチックで民俗品（筆者注・民具のこと）を採集することの意義を自ら悟った」。そして「方言の研究にしても、仮名だけで集めた時の危険は想像以上で、ビクといい、カゴといい、フゴといい、モッコといい、その何れにしても実物なしでは本体の解らぬものが多い」と述べ、「仮名や文字の上だけで幾ら集めて議論しても、実は始まらない」「実物が出てきて初めてその生活の技術なり態様なり、またその奥の思考に気のつくものは沢山ある」「実物が物を云う所もある」という（澁澤一九三三 一四—一六頁）。

言葉の重要性を認めつつも実物をより重視する姿勢は、文献、図像、言葉を併用することで、民具を取り巻く事象も包含する。一九三五年の新潟県糸魚川での製塩調査では、専売制導入により行われなくなっていた揚浜製塩に関し、聞き取りに合わせて民具を用いた実際を再現してもらって資料化に努め、「タレ集約の操作は残存せる器具を用いての仮演出によりよく了解出来た」という（澁澤一九四三 三三五頁）。また、早川の花祭調査を支援するいっぽう、自身も「花狂い」と称するほど何度も現地に赴いて花祭を実見した。

実物・実態に拘る敬三の姿勢で注意すべきは、対象をそののみで完結するとはみないことである。敬三は、一九三〇年、自

宅改築と早川の『花祭』刊行を記念して現愛知県東栄町奈根中在家の花祭を自宅に招いたが、『花祭』について「社会経済史的な裏付がなかった」点を「物足らぬ感じ」と評し、自宅公演も「三河の奥へわざわざ行つてまでも思われる方々に。花祭の抜粋篇でその概念を得られるようにと思った」という（澁澤一九三三 一四頁）。敬三にとつての花祭は、あくまで実社会の中で幾世代にもわたつて持ち伝えられてきたものに他ならなかったのである。

なお、敬三の実物・実態への拘りは、祖父・栄一の実業精神を学問面で継承して実践・展開させたものという佐藤健二の指摘は恐らく正しい。しかも佐藤は、栄一の実業論に農民性を読み取り、その淵源を埼玉県血洗島村の百姓という出自に求める（佐藤二〇一四）、類似の指摘は有賀喜左衛門もしており（有賀一九七六、それは当時の時代背景と照らしても興味深い。²）

五、「みる」という方法

民具、文献、図像、言葉を手掛かりに実物・実態に迫るために採られた方法は、「みる」であった。ここでいう「みる」は正確に把握して記録する姿勢であり、柳田の位置付けた「みる」

とは質を異にする。柳田は『民間伝承論』（一九三四年）や『郷土生活の研究法』（一九三五年）で、民俗学の扱う資料を「目に映ずる」「有形文化」、「耳に聞こえる言語資料」、「最も微妙な心感覚に訴えて始めて理解できる」「心意現象」の三つに分類する。この分類は、調査者と調査地との関係性を示すと同時に資料の重要度でもあり、「心意現象」が「骨子、即ち生活意識」として重視される一方で、「有形文化」は、旅人も容易に採集できる「外形から見ただけで理解し得る事實」として軽視された。

柳田の「みる」に対し、敬三の「みる」は、「目に映ずる」受動的な「みる」ではなく、積極的に情報を獲得しようとする主体的行為としての「みる」であった。従って、それは、肉眼はもとより、最新機器も用い、また複数人の目でなされ、それによって可能な限り正確かつ客観性の高い情報を得ようとする「みる」であった。

肉眼で「みる」方法は、民具をじっくり観察してスケッチや計測によって正確に把握する基本的行為である。敬三の周辺で民具の観察にあたった人物に、宮本勢助や早川孝太郎、今和次郎など画家や建築を志した絵心ある人物が多かったのも、肉眼で「みる」が重視されていたことを示している。

「みる」には肉眼のみならず最新機器も用いられた。足半研究のレントゲン撮影も、癌研究所に依頼できる力が敬三にあった点を差し引いても、「みる」を徹底した態度として評価される。それは事象に対しても同様で、写真や動画に記録するという「みる」が積極的に採用された。宮本常一に写真撮影を勧め、自らも天竜川沿いの荷物運搬の習俗・中馬について現地で再現して十六ミリに収めている。

こうした事物・事象自体の情報に加え、それを取り巻く社会経済的・歴史的背景を把握するために用いられたのが文献や図像、そして言葉であった。文献を読んで「みる」、図像から探して「みる」といった多様な「みる」が採用された。特に言葉を聞いて「みる」姿勢については、民具図彙の出版計画を振り返った際「我々が民具に対して持つ智識の如何にも貧弱であることを自覚」したといい、民具を単なる「物的存在でなく、人との交渉、家との交渉、村との交渉と云ふ風に生きた民具として見る」のために「まず訊かねばならぬ」と述べる（澁澤一九三七—二二五〇頁）。いつ、どこで、誰が、どのように使ったか、また使用者や製作者のどのような思い入れがあるか、といった民具の生きた姿に向き合わないと民具の十分な把握は叶わず、従って心意にも近づけないとされたのである。

六、多角的／客観的に「みる」

「みる」に関してもう一点指摘しておくべきは、ある事物や事象を複数人で「みる」姿勢である。複数人による調査は、玩具研究ですでに發揮されていた。玩具のテーマを分担して各人が収集し、責任もって名称や採集地などの情報を付与した。この積み重ねが実を結んだのが『所謂足半に就いて(豫報)』であった。それは「同一の課題を多数者で手別けをして研究してみた」との願望」から行われた「チームワークとしては」「最初の試みであ」り(澁澤一九三七—二 一八八頁)、敬三を中心に小川徹、磯貝勇、宮本馨太郎、高橋文太郎、松尾象一、木川半之丞の七人で足半という一つのテーマに取り組んだ。

複数人による調査には大きな意義があつた。それは多角的視点の確保であり、それによる客観性の担保である。多角的視点の確保とは視点を狭めないことである。「ともすると最初に中心部に來たもののみに飛びついて、これだけを事実として他に眼を動かさぬことがありがち」なように(澁澤一九三七—二二五二頁)、視点の限定は正確な把握を妨げることの意味した。敬三の携わった共同調査には専門を異にする人々が参加するこ

とも多かつた。多様な人々の「みる」が多様な情報の獲得をもたらし、正確な把握を助けると考えられたのである。加えて「人格的に平等にして相異なつた人々の力が仲良き一群として働く時その総和が數學的以上の價值を示す」というとき(澁澤一九三八 一三頁)、それは単なる集まりに止まらない、相乗効果的価値を生む可能性も内包していた。従つて、各人の獲得したデータの集積も、単なる集合ではなく、有機的関連をもつものであつた。限られた分野よりも複数分野から「みる」ほうが、把握と理解に厚みと正確さを増すことは論を待たないだろう。

多角的に「みる」は、必然的に客観性も担保することになる。獲得されたデータは、基本的に誰もが同じ条件で利用できる質を備えており、調査者が独占的に所持・利用すべきではなく、誰もが自由かつ平等に利用すべきであつた。「論文を書くのではない、資料を学界に提供する」「原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的」(澁澤一九三七—一五七七頁)という敬三の発言は、それを象徴していた。

七、二次資料の抽出

実物・実態を徹底的に「みる」ことで得られた客観性の高いデータは、調査の初期段階に位置する資料である。敬三は、一九四一年の社会経済史学会大会の講演で「立派な研究の結果」より「二つ前の状態に於て素材的な資料を出来るだけ出版する」といった（澁澤一九四一 六〇六―六〇七頁）。それは逆にいえば、「素材的な資料」は、それで終わりではなく、次の研究・分析に利用されてこそ意味をもつことである。民具、文献、図像、言葉を「みる」ことにより得られた資料の先に敬三は何を見ていたのか。

敬三は、資料が「数多く集積されてから後、これを通覧整理し、これを考究究明し初めて、第二次資料すなわち学問的にものをいう資料が生まれてくる」「今後かかる第一次資料をできるだけ拡充して、もって第二次資料を抽出しうるようにその土台を大にし、これに普遍的妥当性を付与せしめる」（澁澤一九三七―二 二五二―二五三頁）といい、研究・分析に資する二次資料を抽出する点にも注意を払っていた。

敬三は、集まってきた（特に民具の）データの、その先につ

いて興味深い発言をする。「多く集れば集るほど、それが、ある統一へ向って融合していくと同時に、そこには単一の標本の上からは見出せない、総合上の一種の美を感じる」といい、集積にある種の美を見出すのである。それは、美術品の美や民芸品の用の美のような単体に見出される美ではなく、「一つ一つには随分と汚らしい」が集積することで生まれる「一種特有の内的美」であった（澁澤一九三三 一六―一七頁）。

集積に美を見る点は、敬三の資料操作を知るうえでのカギとなる。敬三は、玩具研究で「各地の玩具の色彩をセクシヨンペーパーで表わし、その数値を出して、東北と南方の玩具を比較し」ようと考えた。そこには、「甲の村では盛んに玩具を産み出すのに、その隣には全く知らん顔をしていた村があったりする、その差異の原因についてとか、またある信仰に基く特殊の玩具や縁起ものの製作動機とか、或いは玩具等の地方的分布を見ているうちに、何らかの系統を発見し、そこからその伝播形式のようなものが、少しは解りはしまいか」という問題意識があった（澁澤一九三三 一二頁）。

この問題意識は達磨研究へ引き継がれた。「関東の達磨市は鎌倉街道沿いに分布しているので江戸文化以前を知る手掛りになるのではないか」「発生系統と変化過程を逐い、ひいて他の

文化の伝播移動の型式なりに一つのヒントでも得られぬものか」と収集・整理した結果、「江戸文化以前」の把握までは至らなかったが、越ヶ谷系、所沢系、八王子系、相模系、豊岡系という五つの系統を見出す。敬三自身はこれを「不成功に終つた」と顧みるが、資料操作の結果、系統分類まで辿りついた点は重要である（澁澤一九三三 一二—一三頁）。

集積には自ずと比較が伴う。比べることで様々な可能性が生まれる。客観性を高めた資料こそが共通の土俵での比較を可能とする。敬三は、同一（と考えられる）資料を比較して系統分類する方法を採った。「集めてみてすぐ気のつくことは、例えば、動物の種属名のように、ワラジ・エチゴエンシスとも名付けなくなるほど、その標準名なり学名なりが欲しくなることである。数量種類がうんと集り、その製法仕法から系統へと研究が進むと、動植物に於ける如き自然分類は不可能であるが、一種の分類学は成り立つとさえ思われる」（澁澤一九三三 一六頁）これはいうまでもなく帰納法である。具体の現実を積み上げて比較した結果、系統分類されること、これこそが敬三がいった「学問的にものをいう第二次資料」ではなかったか。その意味では、敬三にとって二次資料は、客観性の高いデータとしての資料と、そこから抽出された分析の足掛かりとなる資料との二

段階があった。しかも資料操作法自体も、神野善治が「知りたいたいと思う『テーマ』が先行し、方法はあとからついて来る」といい（神野二〇〇三 一二頁）、河野通明も「資料にぶつかってからその都度一番いい方法を考え実行に移し」たというように（河野二〇〇三 二六頁）、帰納的に採用された点で徹底的に帰納的であった。こうしてデータは本格的な分析、すなわち発生や変遷、伝播といった事物・事象の本質や歴史に接近する可能性が開かれた³⁾。

八、社会経済の重視

集合の美は、比較から系統分類へ向かう美であると同時に、有機的関連を通して社会経済全体をみる美でもあった。敬三は、民具の収集に関連して「我々の祖先が、極めて自然裡に発明し使用してきた各種各様の民俗品の全体を総合して考えた時、そこに我々の祖先を切実に観、またその匂いを強く感じ、懐しく思う意味に於て、自分には、今アチックの採集は、その数量に於てたとえ僅少であっても、これは今述べた全体への一部分であつて、しかも、それは確かに有機的な一部として、血も涙も通っているという気がしてならない」という（澁澤一九三三

一六〇—一七頁)。

また、「その時代の生活全体、経済生活ばかりでなく、精神生活、信仰生活、団体心理、芸文、表現の流行、その他凡百の技能、いろいろなものが渾然として決して一つ一つに分れておるものではない」から「単に技術ということだけを見るというのはなくして、もう少し深い根柢の中に、人間性なり、その時代なり、所なり、その条件なり、あらゆる方面から十分な検討を加え」るべきともいつており(澁澤一九四一 六一八—六一九頁)、民具やそのデータが単体で存すると否定的に否定的であった。それらは、あくまで有機的繋がりをもって生活の中に息づいているとみたのである。

有機的関連性に配慮しつつ生活をみるとは、端的には事象・事物を社会経済全体の中で捉えるということである。敬三は、アチックミュージアムの活動を「民族学的方面及び社会経済史的方面」と「水産史的方面」という二部門に分けるが(洪沢一九四一)、「民族」と「社会経済」を一体としている点は注目される。『花祭』に「社会経済史的な裏付がなかった」点に不満を漏らし(澁澤一九三三 一四頁)、自らは花祭を実見しつつ中馬に興味を抱いた点はこうした事情をよく示す。

こうした敬三の視点の背景に、日本資本主義の父、澁澤栄一

の嫡孫という境遇があつたことは否めない。関東の織物業の製造技術や販売形態などを扱った東大の卒業論文(一九二二年)、栄一の生誕百年を記念した日本実業史博物館の構想(一九三七年)などは敬三が社会経済に常に目配りしていた証左であろう。³⁾

九、生活者／異民族への眼差し

この社会経済全体への配慮の延長に、吉田三郎の『男鹿寒風山麓農民手記』や『男鹿寒風山麓農民日録』などに代表される日誌類の作成もあつた。敬三の「農民、或いは漁民、こういう本を書いたことのない人々の本を出版してみたい」(澁澤一九四一 六〇六頁)という思いから進められた出版活動は、地域の生活をまるごと捉える作業であるとともに、在地の「常民」が自らの暮らしぶりを詳細に記すという、生活者の視点から描かれる世界の重視でもあつた。

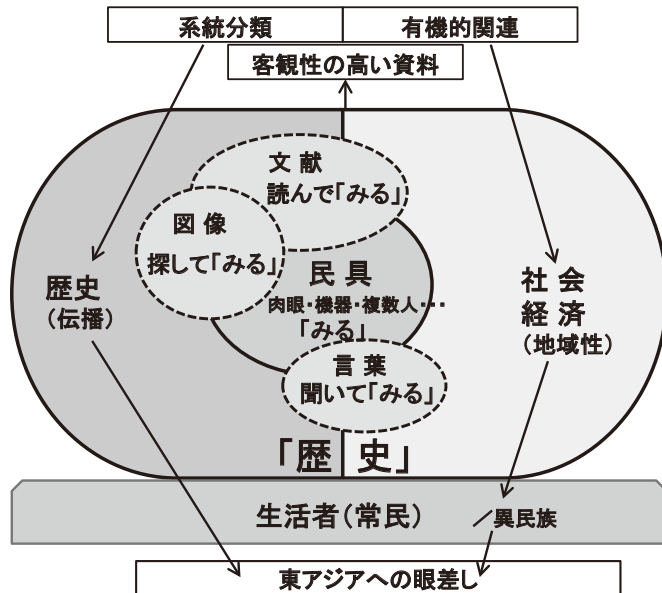
生活者の視点の重視は、客観性を追求する姿勢と矛盾するようにもみえるが、心意も含めた生活をまるごと捉えようという立場からすれば必ずしも矛盾しない。佐藤健二も、民間学の論点の一つ、生活者について、敬三の学問では研究対象であると

同時に研究主体でもあったと指摘しており(佐藤二〇一四)、そこには調査される側に立って物事をみる姿勢が敬三自身の身についていたといつてよいだろう。

一九二六年に米穀大会の出席者に同伴して台湾を訪れた際も、肥料を施すと却って収量の落ちる在来種の米を「一大特長」と評し、「内地種米によって駆逐さるべきものでないことを物語る」と述べるなど、土地の事情に即して物事をみる柔軟な姿勢を見せる(澁澤一九二六 三八―三九頁⁵⁾)。

そして、この日本列島を超えた生活者／異民族への眼差しもまた、敬三の学的構想の可能性であった。敬三には日本列島を超えた視点での文章も多く、自身の分野を「民族学」と称することもあった。例えば『塩問答集』を振り返った際も「如上の諸事象をば食塩を主として岩塩に依存した諸民族間の塩に対する心理や民俗と対比考察し得たら、或いはまた別の観点から興味ある解釈が自ずから導き出されたかも知れない」(澁澤一九四三 三六二頁)と、様々な民族との関わりで考える必要性を指摘する。

もちろん敬三自身、台湾旅行の際に「本島官民の努力により今や全く楽土と化した」と述べるように(澁澤一九二六 一九頁)、日本が朝鮮半島や台湾を植民地化し、東アジアに進出し



澁澤敬三の民俗学の調査対象と方法・視座

つつあった当時の情勢と、昭和初期その政治経済の中枢にいた敬三の立場を考慮せざるを得ないが、それを加味してもなお異民族の文化を文化相対主義的な見方で捉えていた点は注目してよい。

特に東アジアについては、朝鮮半島にたびたび旅行して「愛に飢えた孤児の感じにも似たものを朝鮮の農民は心のどこかに持っている」と朝鮮半島の人々に共感の眼差しを向け（渋沢一九三六 一八頁）、台湾などの「生蕃に対する学問が、我が国の北に住むもう一つの原始民族たるアイヌと同様に研究され」るべきと主張する（澁澤一九二六 三八～三九頁）。この点は、柳田が沖縄を同一民族・文化と捉えながら学形成を図る一方で、朝鮮半島やアイヌへの眼差しの冷めていた点と対照的である。敬三が、ノルウエーの野外博物館スカンセンを参考に整備した民族学博物館にアイヌの住宅を移築したこと、『アイヌ民族研究資料説話』（一九三六年）や『朝鮮多島海旅行覚書』（一九三九年）などの出版を支援したこと、さらにアチックミュージウムが収集して後に重要有形民俗文化財に指定された「背負運搬具コレクション」にアイヌ関係五点のほか朝鮮半島二点、台湾六点という異民族の背負運搬具も含まれていることは、敬三が東アジアで物事を考えようとしていたことを物語つ

ていよう。

十、おわりに

澁澤敬三の構想した学問は、自身が「民俗学の一部門として極めて重要」（澁澤一九三三 一五～一六頁）と述べるように、民俗学の一分野と位置付けるべきだろう。

その調査対象と方法・視座は、端的には図のようになるだろう。すなわち文字では十分描かれなかった生活の具体を、生活者（常民）の視点から描きだすという基本的視座のもと、民具、文献、図像、言葉を経合的に扱うものであった。中でも中心とされたのは民具とそれを取り巻く社会経済的・歴史的背景で、それらをより深く理解するため文献、図像、言葉も不可欠であった。

民具という実物の重視は、敬三の学的方法の本質といえ、肉眼はもとより最新機器で「みる」、複数人で「みる」、さらに文献を読んで「みる」、図像から探して「みる」、言葉を聞いて「みる」という、多様な「みる」の総合的採用により、可能な限り正確かつ客観性の高い資料の獲得を目指すものであった。

客観性の高い資料は有用な資料であり、それを集積すること

で、比較して系統分類する可能性、有機的関連性から社会経済全体を捉える可能性を内包した。

特に社会経済全体への眼差しは、敬三の支援した在地の生活者自身による生活記録にも通じ、そこには生活者の視点という視座が改めて透けて見える。それは、異民族の尊重という眼差しにも通じており、そこにアイヌや朝鮮半島、台湾を含めた東アジアで物事を考えるという敬三の学的構想のさらなる可能性もあった。

敬三の民俗学の方法と可能性を以上のように整理できるならば、私たちは、日本の民俗学に柳田や折口の民俗学などとともに「もう一つの民俗学」として渋沢民俗学が確かにあり、それが現在も豊かな可能性を内包していることを認識しなければならぬだろう。

注

(1) 拙稿脱稿と前後して、安室知が柳田と敬三の言葉(命名)の扱い方を対照的に論じている。柳田が言葉に実態を従属させたのに対し、敬三は実態にこだわって実態から出発したとし、柳田の「同種異名(シノニム)」と敬三の「同名異種(ホモニム)」という興味深い対比を指摘する。また敬三が魚名を社会的所産として扱った点も明確に指摘して

いる(安室二〇一六、一〇二—一〇四頁)。

(2) 敬三の無欲の人格も、栄一の実業精神を受け継いだという指摘は多い。それは幕末から明治にかけて富国に尽力した農村の有力者の精神に通じるだろう。明治農政の遂行者は、官の意向と民の実行が連動する必要があるが、当時の農村の有力者、いわゆる老農が時に私財を投じて没落するほどの情熱でその架け橋となった(石垣二〇〇九)。この老農の無欲の姿勢は、その後の寄生地主とは明らかに質を異にする。それは血洗島村という農村の有力者の出であった栄一の実業精神にも通じ、敬三もそれを受け継いでいたといえないだろうか。

(3) 佐藤健二は、この集合体の「美」を「学問の世界での社会資本の整備」という(佐藤二〇一四、八五頁)。これは、学問に資する資料を提供することの重要性を示す指摘だが、同時に有形の民俗文化財の保護制度にも関わる。敬三はこの保護制度の整備にも関与しており、保護制度には資料的価値の重要性を公に宣言する面もあった。その意味では、佐藤もいうように、指定文化財の情報や分類が研究に必ずしも有効に役立てられていない現状、あるいは指定がゴールとなつて研究の停滞を招く現実もみられ、民俗をめぐる文化財保護と調査研究のあり方を別途検討する必要があるだろう。

(4) 事物や事象の有機的関連に配慮して社会経済とともにまぐるごと捉える姿勢は、柳田の主導した『山村生活の研究』(一九三七年)への山口麻太郎の批判に通じる。また、アチャックミューゼアムの同人であった早川が柳田と袂を分かち、桜田勝徳も晩年とはいへ柳田存命中に柳田批判を展開したことを考えると、敬三と柳田との学的視座には大きな違いもあったことを指摘しておくなければならない。

(5) この点は、農政官僚時代に九州・四国を視察した柳田が「肥後の民風」(一九〇八年)で阿蘇地方の農耕習俗に明治農政の論理をそのまま導入することを危惧する発言にも通じていて興味深い。

参考文献

- アチックミュージゼアム 一九三六 『所謂足半に就いて（豫報）』
有賀喜左衛門 一九七六 『一つの日本文化論 柳田国男に関連して』 未来社
石垣悟 二〇〇九 「農のいとなみと労働」 『日本の民俗四 食と農』 吉川弘文館
石垣悟 二〇一六 「民具展示と差別用語」 『博物館研究』 五一巻八号
小川直之 二〇〇三 「民具研究の歴史と方法—澁沢敬三の視点—」 『民具研究』 一二八号
小川直之 二〇〇四 「画像資料と民俗学」 『人文科学と画像資料研究（國學院大學学術フロンティア事業研究報告第一集）』
神野善治 二〇〇三 「澁沢敬三とアチックミュージゼアムの民具研究—『筌』のテーマを中心に—」 『民具研究』 一二八号
河岡武春 一九七五 「澁沢敬三と筌と足半」 『日本民俗学』 九九号
河野通明 二〇〇三 「総引はつくれぬものか—歴史への視点—」 『民具研究』 一二八号
佐藤健二 二〇一四 「澁沢敬三における『もうひとつの民間学』」 『歴史と民俗』 三〇
佐藤健二 二〇一四 「日常史の資料学の課題—柳田国男と澁沢敬三に学ぶ—」 『国際シンポジウム報告書V』
佐野眞一 一九九六 『旅する巨人 宮本常一と澁沢敬三』 文芸春秋
佐野眞一 一九九八 『澁沢家三代』 文春新書
澁澤敬三 一九二六 「南島見聞録」（参照したのは『澁澤敬三著作集』一卷）
澁澤敬三 一九三三 「アチックの成長」（参照したのは『澁澤敬三著作集』一卷）
澁澤敬三 一九三六 「五回目の朝鮮」（参照したのは『澁澤敬三著作集』三巻）

- 澁澤敬三 一九三七— 「『豆州内浦漁民史料』序—本書成立の由来」（参照したのは『澁澤敬三著作集』一卷）
澁澤敬三 一九三七— 「『民具問答集』まえがき」（参照したのは『澁澤敬三著作集』三巻）
澁澤敬三 一九三八 「アチック根元記」（参照したのは『澁澤敬三著作集』三巻）
澁澤敬三 一九四一 「所感 昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十一回大会にて」（参照したのは『澁澤敬三著作集』一卷）
澁澤敬三 一九四三 「塩『塩俗問答集』を中心として」（参照したのは『澁澤敬三著作集』一卷）
澁澤敬三 一九五三 「受けうりばなし二三」（参照したのは『澁澤敬三著作集』三巻）
澁澤敬三 一九五九 『日本魚名の研究』（参照したのは『澁澤敬三著作集』二巻）
新谷尚紀 二〇一— 「民俗学とは何か」 吉川弘文館
原田健一 二〇〇九 「モノをめぐる澁沢敬三の構想力—経済と文化をつなぐもの—」 『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』
福田アジオ 二〇〇二 「澁沢敬三と民俗学」 『屋根裏の博物館 実業家澁沢敬三が育てた民の学問』 横浜歴史博物館
安室知 二〇一六 「蝸牛と魚—周囲論の図化をめぐる—、柳田国男と澁沢敬三」
『日本民俗学』 二八八号
柳田国男 一九四四 『國史と民俗学』（参照したのは『定本柳田国男集』二四巻）